

おふくろの味

原作 小太刀美恵子

編詩 小林 守

里の秋

母は 前かがみになって  
背中であみつけたのです

夢枕に立った母が

いつの間にか台所で

独り言を呟いています

「しょうがないねえ」

(私はまだおふくろの味に

なれないのでしょうか)

二月の しもつかれ

あたため返すと 鍋の底から湧いてきた

甘いひき肉 ばらばらの青海苔が

溶け込んだ焼きそば

言葉が豊かだったので 五目御飯

夏の冷麦

舌の奥にゴマ汁が

ほろ苦くしみていく

すき焼きの食卓で

こどもたちが競い合う

母よ

五月の水羊羹を

人に分ける喜びを教えてください

静かな里の秋

いくつもの眼に囲まれて

母は 手塩で味をつけたのです

## 台所の詩

原作 黒川フミ  
編詩 小林 守

娘や姪に磨かれて  
軽やかに生き返ったような  
台所のキュッキュツの歌を  
今の私には もう  
奏でることはできないが

白内障の目と  
腰の痛みが  
水垢のように滲む台所は  
老猫と一緒に  
使い込んだ私の詩を  
無言のうちにはべらせていた

薬缶や鍋が 瀬戸物までが  
桶や布巾や 流し台の奥までが  
鼻唄まじりに磨かれて  
サツサツサ  
キュッキュツキュ  
と晴れやかなのはあんまりで  
裏切りのようで  
すこし妬ましかったのだが

一時 気になってうろついた相棒が  
ぶいと横向いてしばらくは  
寄り付かなかったので  
さもありません  
私は私の詩を書き続けるのだ

(二〇〇四・一一・三三)

## アイドル

原作 武田裕也  
 編詩 小林 守

秋雨

濡れ落ちた一枚のもみじを  
 ぼくは足下から掬いあげる  
 ぐちゃぐちゃになっっている  
 美しいアイドル

「朝霧が立ちのぼる中に  
 赤々と燃えいする一つの紅葉を見つけ  
 みなそれを希望のアイドルといい  
 人はみな時を忘れ 時を止める  
 そうすることではしか人は  
 未来を楽しむことはできないのだ」

寒気がさらに落ちてきて  
 朽ち果てることのない  
 アイドルの秋にも  
 雪化粧が別れを告げる

人知れず移ろう季節  
 曇と共に落ちてくる一枚のもみじを  
 ぼくは両手で受け止める  
 ぐちゃぐちゃになっっている  
 美しいアイドル

(1100四・111・1111)

## 心のパレット

原作 小太刀悦子

編詩 小林 守

行き詰ったら  
勇気を出して  
毀れてみよう

ワンパターンの  
小さなパレットのうえに  
むずかる私が余所見した隙に  
いたずらのような天の配剤  
違う色を搾り出してみる

行き詰ったら  
ためらわず  
混ぜてしまおう

大きなパレットの中で  
ワイワイガヤガヤ  
色と色の絡み合わせを  
子どものように試してみる

そっしつ  
できて来る私のほうが  
すっしつと面白

(110011・11111111)

祖母

原作 小太刀悦子

編詩 小林 守

秋の夜長 今年も  
祖母の夜なべが始まります  
シンプルな一年を  
待っていたかのように  
声を弾ませ

実のついたゴマの茎を  
片手握りの大きさに束ね  
明日は軒下に一列  
朝礼のようにならべます

緑のロケットが  
やがて茶褐色の乳首になり  
お日様に向かつて  
パチンパチンと弾けます

もう待てません この合図  
ゴマ粒が鞘から飛び出し  
黄金色に輝くとき  
祖母のスローな時も熟して  
馥郁と香るのです

(11000・四・11・1111)

## コンニャク

原作 宮坂芦伴

編詩 小林 守

寒い冬の夜 大芦川のほとりの

芦伴亭で 巻織汁を囲み

野の聖と 亭主芦伴が

コンニャク問答で

一夜を過ごした

野聖 身をほぐし 体の真を温める このけんちゃん汁はありがたい

さて 世間虚仮唯仏是真 ということを亭主はいかに

亭主 仏は身であり 世間を虚仮にするなということだ

野聖 当たらずとも遠からずかだが一つだけ 世間は虚仮だということだ

亭主 これは心外 世間やこの身を虚仮にして何の仏道ぞや

一切衆生悉有仏性ということではないか このけんちゃんの具物にも

悉く仏性ありということではないか

野聖 いやすべての生きとし生けるものに仏性は宿るが それは虚であり

仮のものということだ 仏のみが永遠の真実なのだ

亭主 世間を虚仮にし 体の芯を温めるけんちゃんの具も虚仮にして

わしの人生は成り立たぬ 大根・白菜・里芋・葱・人参・牛蒡・

豆腐・それに主役の蒟蒻をくそ坊主 何と心得る何の仏道ぞや

野聖 そう逆毛立てなざるな亭主 「しん」にもいろいろあって

間違いやすい 心身は一つで虚仮だが 真の仏は別なのだ

亭主 いや 真の仏は別ではない 心身の中に宿っているから一切衆生は

救われる 別のところにあるのなら ただ信じるだけだ 拝むだけだ

それは世捨て人の信仰だ 世を捨ててどうして衆生が救われる

(この問答は延々と続く ゆえに蒟蒻問答という)

二〇〇四・一一・三三